

廁の中にて

——大碓命と小碓命——

守 屋 俊 彦

一

小碓命は勇武の皇子であった。彼に敗北を喫した熊曾建が御名献上の際、「然るに大倭国に、吾一人に益りて建き男は坐しけり。」(記)といっているように、比類なき勇武の持主であった。だが、この勇武が、父の景行天皇には粗暴なものと受け取られたのであった。

それには一つの事件があった。彼には大碓命という兄がいた。日本書紀の系譜によれば、「一日に同じ胞として双に生れたまひき。」(景行紀)と記されているように、二人は双子であったともいわれている。その大碓命が、天皇から、三野国の国造の祖大根王の娘の兄比売、弟比売を召してくるようにと命ぜられた。ところが、大碓命は自らがまずこの姉妹と共寝をし、素知らぬ顔をして他

の女を差し出し、しかも、朝夕の会食にも出席しなかつた。そこで、天皇は小碓命に、「専ら汝ねぎ教へ覺せ。」と仰せられた。そして、結局は、

天皇、小碓命に詔りたまひしく、「何しかも、汝の兄は、朝夕の大御食に参出来ざる。専ら汝ねぎ教へ覺せ」とのりたまひき。かく詔りたまひて以後、五日に至りて、なほ参出ざりき。ここに天皇、小碓命に問ひたまひしく、「何しかも汝の兄は、久しく参出ざる。もし未だ誨へずありや。」ととひたまへば、「既にねぎつ。」と答へ白しき。また「如何にかねぎつる。」と詔りたまへば、答へて白しけらく、「朝曙に廁に入りし時、待ち捕えて搯み批ぎて、その枝を引き闕きて、薦に裏みて投げ棄てつ。」とまをしき。

(記)

というような、悲惨な結果になったのである。彼が天皇の、「専ら汝ねぎ教へ覺せ。」といわれたことばをどのよ
うに理解したのか解らないが、——後に述べるように、
この「ねぐ」という語に問題がある、——いとも無難作
に大確命を殺害しているのである。しかも、「その枝を
引き闕き」「薦に裏みて投げ棄」てるといふような、ま
ことに残酷な手段を使っているのである。これでは粗暴
とみられても致し方あるまい。

そこで、彼は天皇から西征、引きつづいて東征を命ぜ
られることになる。天皇から征討の將に任せられるとい
うことは、一見名譽なことのようにみえるのだが、要は
都から追放されたということなのである。あまりの粗暴
のために、天皇の身辺から遠ざけられたということでも
あった。

それにしても、廁の中で殺害するというのはどうもす
っきりしない。用をたしているので油断があり、そこを
狙ったということなのであろうか。相手を油断させて置
いて、一挙に打倒するということは、古代では必ずしも
卑怯な行為ではなかったのである。むしろ、卓れた能力
であったといつてもよい。

だが、同じように、油断させて打倒するにしても、雄
略天皇が、王位継承に絡んで、市の辺の押磐の皇子を蚊

屋野に狩りに誘いだし、

市の辺の押磐の皇子、すなはち随ひて馳せ獵す。こ
こに大泊瀬の天皇、弓を彎き馬を驟せ、陽り呼ばし
て「猪あり」とのりたまひて、すなはち市の辺の押
磐の皇子を射殺したまひつ。皇子の帳内佐伯部売
輪、またの名は仲子。屍を抱きて駭惋ひ、所由を解らに、
反側び呼ばひ号びて、頭脚に往還りしをも、天皇み
な誅ちたまひき。(雄略即位前紀)

というように、野に馬を走らせながら、馬上で射殺した
方が、まだ正々堂々としている。廁の中で用をたしてい
るところをいきなり殺したというのは、何処か暗く陰湿
な感じがする。勇武の持主である小確命の行為としては
疑問が残るところである。

二

ところで、その殺害の舞台になった廁であるが、和名
抄に、

按加波夜、川屋也、謂_レ設_レ之流水上、使_レ糞不_レ留、
高野山彦山之廁、今猶如_レ此、故古事記神武段、謂_レ
之_レ大_レ便_レ之溝流_一、

とあるように、古代の便所のことである。川の流水の上
に作られていたので、カハヤと称するのだといふのであ

る。この説を承けて、記伝には、「古へ厠は、溝流の上カハヤ、ミソノに造りて、まりたる屎は、やがて其水に流去る如く構カクたる故に〔今ノ世に如此構カクへたるもあるなり、〕河屋カハヤとは云なり、」(巻二十)と述べてある。この後の辞書や注釈書なども殆どこの説に従っている。いわば、水洗便所のものとも原始的なものといふことになる。

事実、このような遺蹟が昭和十二年千葉県君津郡清川村大字菅生の古代聚落址発掘の際に発見されている。李家正文博士は、その遺蹟の状況を、「赤色粘土層のなかから、一定の幅の溝のやうな流水路が存在してゐたことは、珍しいのであるが、その溝の傍に堅穴式構造の家屋の址がみられ、しかも溝のなかには、同一方法に十数本の杭が並んで立ってゐた。溝はある傾斜をもつて南から北へと流れ、本流に入つてゐたことがわかる。」「その杭を交叉する横木があり、あたかも棧橋のやうになつてゐた。この杭をたどつてみると、明きらかに人の渡るほどの棧橋であり、しかもその棧橋は家の方に続いて、そこから突き出てるたのである。」と報告し、「これこそ厠の棧橋であることに間違いないと断言できる。」とし、古代の厠がまさしく川屋であつたと推定されている。

何れにしても、古代では、糞などの汚物は川の水に流していたことになる。水の清浄力を利用したもつとも自

然な処理方法である。だが、その手段が、ほかならぬ、川の水というところに、このように簡単に割り切れない問題がある。川は下方に向つて流れているのだから、確かに汚物を流し去ってくれる。しかも、水には清浄力があるのだから、汚物をきれいに清めてもくれる。しかし、一方古代信仰では、川は神が通り、その水の中から神が生れます聖なる場でもあつたのである。その聖なる場に汚物を流すということになれば、聖を犯すということになりはしないだろうか。そこでは、聖と俗との関係はどのようなことになるのだろうか。厠は果して用をたすだけのところだったのであろうか。

さて、尾張国風土記逸文をみると、次のようなことが書かれてゐる。

熱田の社は、昔、日本武の命、東の国を巡歴りて還り給ひし時、尾張連等が遠祖宮酢媛の命を娶して、その家に宿り給ひき。夜頭に厠に向き、身に帯ばせる剣を桑の木に掛け、遣れて殿に入りましき。すなはち驚きて更に往き取り給ふに、剣に光なす神ありて、把り得給はず。すなはち、宮酢媛に謂り給ひしく、「此の剣は神の氣あり。斎ひ奉りて吾が形影とせよ」と宣り給ひき。因りて社を立て、郷によりて名となしき。

日本武の命が主人公であり、舞台装置としての厠もでてくるので、この際参考になるような気がする。とくに厠をめぐる状況が、おぼろげながらも描かれているので、この話をしばらく使って論を進めてみたい。

この話は、全体としては、熱田神宮の縁起譚の形態になっているのであろうが、厠に限っていえば、幾つかの注目すべきことがみられる。それらを厠を中心にして拾いだしてみると、

(イ)日本武の命は新婚の夜に厠に行っている。

(ロ)その時、彼は剣を身に帯びていた。

(ハ)厠の側に桑の木があった。

(ニ)その桑の木に剣を掛けて置いた。

(ホ)忘れて殿に帰ったので急いで取りに行った。

(ヘ)剣に光る神が宿っていた。

というようなことになる。

これら幾つかの項目を総合してみると、そこから浮かび上ってくるのは、厠は単に便所であるばかりでなく、今少し違った役割のある場所だったのではないかということである。例えば、(イ)のように、厠の側に桑の木が立っていたということである。それは全く偶然なことではなかったかも知れない。だが、(ニ)日本武の命自身が身に帯びていた剣をわざわざそれに掛けているのだから、普通

の木だったとは思われない。実は、桑の木は、古代信仰では、神の宿る木だったのである。打聞集をみると、空から墜落した雷は、桑の木を梯子のようにして昇天している。

昔、尾張国に弘田返立る翁有り。田を返立る間に、にはかに神なりて落ぬ。見ば、いかづち、童の様に、谷におどり入て、まどふ。翁、くはをささげて打とす。雷、翁に云「我を打事なかれ、我を空に上げたらば、汝が子と成て来。」と云ければ、翁、子も无りければ、くはを以て電を桑の木の本来にかきよせて、其桑木を便として、空に登ぬ。(道丈法師事)

ここでは、桑の木は雷が空に登るための踏台になっている。その雷は、古代では神として信仰されていたのである。すれば、桑の木は雷神の宿る木ということになる。聖樹だったのである。⁽³⁾

その桑の木が厠の側に立っていたのである。厠が単なる便所であったとすれば、そのような汚い場所の側に、聖樹としての桑の木があるというのはおかしいのである。厠には、その側に聖樹があるのが似つかわしい、何らかの聖なるものがあったのではないだろうか。

雄略記をみると、天皇が長谷の榎の下で豊楽をされた

時、三重姦が粗相をしたので、殺そうとされたところ、
三重姦が、

廻向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の

日がける宮 竹の根の 根垂る宮 木の根の 根蔓

ふ宮 八百土よし い築きの宮 真木さく 松の御

門 新菅屋に 生ひ立てる 百足る 槻が枝は 上

枝は 天を覆へり 中つ枝は 東を覆へり 下枝は

鄙を覆へり 上枝の 枝の末葉は 中つ枝に 落ち

触らばへ 中つ枝の 枝の末葉は 下つ枝に 落ち

触らばへ 下枝の 枝の末葉は あり衣の 三重の

子が指拵せる 瑞玉蓋に 浮きし脂 落ちなづさひ

水ををることをろに 是しも あやに恐し 高光る

日の御子 事の語言も 是をば(一〇〇)

と歌ったので赦されたという。まさに天皇讚歌であるが、その讚歌の中に、槻が重要且つ唯一の素材として使われているのである。めでたい木だったのである。めでたいばかりでなく、実は、聖樹だったのである。万葉集をみると、

天飛ぶや軽の社の斎槻幾世まであらむ隠妻ぞも(二
六五六)

とあるように、軽の社の中に槻が立っていたのである。聖樹だからである。そこで「斎槻」といわれている。

その槻が新菅屋の側に立っている。いうまでもなく、新菅屋は新穀を神に感謝する儀礼を行うための家屋である。農耕を主とした古代では、もっとも神聖な家屋の一つといえよう。斎屋である。その新菅屋の側に聖樹としての槻が立っていたのである。槻と新菅屋とは聖なるものによって結ばれ一体になっていたのである。側に聖樹があり、それに神が宿らなければ、神を招き入れる斎屋は役に立たないからである。

このように、聖樹と新菅屋とが一体になっているとすれば、聖樹としての桑の木が側に立っている厠にも、何等かの意味において、斎屋的な性格が兼ね備わっていたとは考えられないだろうか。厠と桑の木は、聖なるものによって、何処かで結びついていたのではないだろうか。

三

実は、厠に斎屋的——聖的な性格があったことは、現在の習俗の中にも残存しているのである。厠神信仰である。その厠神については、日本民俗事典には、便所神として、まず、

便所に神をまつることは各地にみられ、その名称も
センチガミ・カンジョガミ・ホウキノダイジン・オ

ヌシサマ・オヒガミサマ・シリシリサマ・ウブスナ
サマ・シモヤノカミなど、地方によっていろいろで
ある。⁽⁵⁾

と解説し、この神をめぐる習俗についていろいろと述べてある。

そのいろいろの習俗については、大藤時彦氏が「廁神考」という論文の中で詳説されているので、ここでは、それを借用して簡略に記してみたい。まず、この神については、不思議と出産と関係が深いことが注目される。産にウブガミが来ないと生まれにくいという信仰が一般的にあり、そのウブガミの中の一神に廁神がいる。飛弾では便所の神様(廁神)のお手伝がないと軽く産めないといいい、武州芳野村では赤飯を炊き廁神と帚神にあげると安産するなどといっている。また、この神は妊婦や生児とも深い交渉がある。妊婦が便所をよく掃除すると、美しい児が生れるといいい、その生児については、三日祝やお七夜などに雪隠参りという習俗がある。越後では男の子なら鉈、女の子なら杓子を腰にさして便所に参るといいう。なお、この神については、多くの禁忌があることが挙げられる。便所内では唾を吐いてはならぬという。唾を吐くと、この神が祟って、目や歯を病んだり、下を煩うなどという。また、夜中に便所に行ってはならないと

いう禁忌もある。珍らしいものとしては、便所には裸体で行ってはならないというのがある。鳥取では、裸体で行くと、この神が角力をとろうといいだすからだとし、坊主が現われるからともいっている。そして、便所神は神なのだから、当然なこととして、便所内の片隅に神棚が設けてある。とくに東北地方に多いとのことである。この神棚には、土人形が便所神の形代として置かれていいることがある。⁽⁶⁾

このように、現在廁神信仰が全国的にあり、この神にまつわる習俗がいろいろと行われているとすれば、古代にも廁神信仰があったのではなかるうか、ということが推測されるのである。だが、今のところ文献にはみられない。ただし、延喜式に御廁や廁殿というのがでていいる。まず、踐祚大嘗祭式に、

此院東北角造膳屋一宇。長八尺。正殿同。端当三東西。東端

二間部以三椎柴。東壁下作三棚閣。西端三間為三盛

膳所。膳屋以北造三白屋一宇。長一丈四尺。部以三椎

柴。西端開戸。二屋南西並皆樹籬。別為一院。

正殿東南造三御廁一宇。長八尺。其壁同三正殿。西南

開戸。主基院殿与上相對。五日之内造畢。

とあり、四時祭式上の大殿祭の条に、

中臣忌部御巫等。以次入三御殿。忌部取玉。懸

殿四角^一。御巫等散^二米酒切木綿殿内四角^一退出。中臣待^三御殿南^一。忌部向^レ巽微声申^二祝詞^一。畢次^三湯殿^一。懸^三玉四角^一。次懸^三厠殿四角^一。次懸^三御厨子所四角^一。次懸^三紫宸殿四角^一。御巫等以^レ次散^三米酒^一如初。

とある。前者で「此院」とあるのは、悠起院のことである。これで見ると、大菅宮の東南に御厠が作られ、その宮殿と同じように壁や戸があったことが解る。また、後者では、厠殿の四角に玉を懸け、米や酒などを撒き散らしている。これらのことは、古代においても、厠が単に用をたすところであるばかりでなく、聖なるものによって彩られていたことを語ってくれているようにも思われるのである。ただし、厠神そのものについての記事は見いだされない。

李家正文博士は、平安時代に厠神が祭られていたことを、類聚雑用抄の記事によって、

水を手に執った童女と燭を手に執った童女との二人が歩いてゆく。と、その後、黄牛をひいた者、案を持って運ぶ者、釜持ちがゆく、家長が恭うやくしく従ひ、その家長には、馬鞍を執った男がついている。子孫である男の子のあとから箱や飯に飯を盛った者が続き、最後に家母が従ひ、お供へものをしながら

神を拝して、門から井へ、井から竈へ、竈から庭を歩いて厠へと詣る。まったく嚴かな式で、いまでも注連縄を張って厠の神を祀るのは、この風習である。

と述べていられる。これで見ると、平安時代に厠神を祭るといふ習俗があり、しかも、竈の神と一連のものとして祭られていたことが解る。ところが、古事記をみると、大年神の系譜の条に、

また、天知迦流美豆比売を娶して生める子は、奥津日子神。次に奥津比売命、亦の名は大戸比売神。こは諸人のもち拝く竈神ぞ。

とあって、古代にすでに竈の神があり、しかも広く人々によって祭られていたことが知られるのである。すれば、その竈の神と一連のものとして祭られる厠神もあつたとみて置いてもよいのではないだろうか。

四

ところで、古代の文献をみると、この厠が聖婚神話と深くかかわっていたことに気が付くのである。例えば、応神記に、秋山の下水丈夫と春山の霞丈夫の兄弟が伊豆志袁登売を争ったという話があるが、そこには、

ここにその弟、兄の言ひしが如く、具さにその母に白せば、すなはちその母、藤葛を取りて、一宿の間

に、衣褌また襦袢を織り縫ひ、また弓矢を作りて、その衣褌等を服せ、その弓矢を取らしめて、その嬢子の家に遣せば、その衣服また弓矢、悉に藤の花になりき。ここにその春山の霞壯夫、その弓矢を嬢子の厠に繫げき。ここに伊豆志袁登売、その花を異しと思ひて、將ち来る時に、その嬢子の後に立ちて、その屋に入る即ち、婚ひしつ。故、一りの子を生き。

とある。三輪山型神話が変容したものであり、きわめて文芸的なものに昇華しているが、藤の花になった弓矢を、「厠に繫」けたというのは、本来は弓矢に化身した神が、その神に仕える巫女と聖婚するために、厠から入ってきたことを意味していたのであろう。

実は、そのように解してみたのは、神武記に次のような話があるからである。天皇が皇后に相応しい美人を求められた時、大久米命が、

此間に媛女あり。こを神の御子と謂ふ。その神の御子と謂ふ所以は、三島溝咋の女、名は勢夜陀多良比売、その容姿麗美しくありき。故、美和の大物主神、見感でて、その美人の大便まれる時、丹塗矢に化りて、その大便まれる溝より流れ下りて、その美人の陰を突きき。ここにその美人驚きて、立ち走り

いすすきき。すなはちその矢を將ち来て、床の辺に置けば、忽ちに麗しき壯夫に成りて、すなはちその美人を娶して生める子、名は富登多多良伊須須岐比売命と謂ふ。亦の名は比売多多良伊須須岐比売こはそのほとと謂ふ事を悪みて、後に名を改めるぞ。と謂ふ。故、ここをもちて神の御子と謂ふなり。

といつて、伊須須岐比売を推薦したという。その母の勢夜陀多良比売は、「大便まれる時」だったのだから、当然厠の中にいたとみななければなるまい。そして、大物主神は、その彼女の「陰を突」いたというのだから、神はその厠から入ってきたとみるべきであらう。

前にも述べたように、古代の厠は川の上に設けられて居り、その川は、固有信仰では、神の通る聖なる道だったのだから、神が厠から入ってくるのは、もつとも自然な道筋といえよう。厠は神が巫女の許に通ってくる場合の入口だったのである。⁽⁸⁾

ただし、この二つの場合には、その川がみられない。しかし、山城国風土記逸文に、

玉依日売、石川の瀬見の小川に川遊せし時、丹塗の矢、川上より流れ下りき。すなはち取りて床の辺に挿し置き、遂に孕みて男子を生みき。

とあるように、聖婚神話には川はあったのである。川は

聖婚神話には必要な舞台装置だったのである。神武記の場合には、この神話の伝承者が三島溝咋であったところから、川ではなく、「溝より流れ下りて」と溝ということになったのであろう。また、応神記の場合には、文芸化したために、神が川を通過してやってくるというように神秘的な面が消えているのであろう。

それにしても、厠は単に通ってくる神が入ってくる時の入口に過ぎなかったのであろうか。前に述べたように、厠に齋屋的な性格があり、現在の習俗ではあるが、とくに出産に関係があるところからすると、もっとも原始的な形態では、案外に厠で聖婚が行われていたのではないだろうか。大物主神が厠で勢夜陀多良比売の「陰を突」いたというのも、露骨な表現ではあるが、そのことをそれとなく語ってくれているような気がするのである。

神武天皇は、この大久米命の推薦によって、伊須気余理比売と狭井河のほとりで結婚されるのであるが、後にその結婚初夜のことを回想し、

葦原の しけしき小屋に 菅量 いや清敷きて 我
が二人寝し(一九)

と歌われたという。この結婚は聖婚なのだから、当然齋屋で行われた筈である。その結婚した屋をわざわざ「し

けしき小屋」——汚い小屋と表現しているところには、そこがかつて用をたすための厠でもあったことの古い感覚の残響があるのでないだろうか。⁽¹⁰⁾ しかも、その屋は、ほかならぬ、狭井河のほとりにあったのである。

このように、厠はかつて聖婚の場であったと思われるのだが、そこはもともと用をたすところでもあったのだから、その方の役割が強くなってくると、厠は単に神の入口となり、聖婚はそこからさらに中に入った巫女の一部屋で行われるというようなことになったのであろう。

ここで、もう一度先に挙げた尾張国風土記逸文を振り返ってみることにする。この時、日本武の命は、(口)厠に剣を身に帯びて行っている。厠に行くのに剣を帯びるというのはいささか変である。一応護身用ということも考えられないこともないが、(へ)にみられるように、この剣は明らかに神的なものである。従って、護身用とは考えられない。そもそも、日本武の命と宮酢媛との結婚は普通の結婚ではなかったのである。この時、日本武の命は天皇の代行者として臨んでいるのである。そして、天皇と地方豪族の女との結婚は、服従儀礼の意味を持っていたのである。すれば、この剣は天皇のレガリヤとみた方がよい。だから、天皇の代行者である彼は、この剣を一時でも身から離す訳にはゆかないのである。身から

離せば、天皇の代行者としての資格を失うからである。

そこで、厠にも帯びて行くし、(外)忘れて帰ったら急いで取りに行っているのである。このように理解してみると、(イ)日本武の命が厠に行ったのは、一見用をたしに行っているようにもみえるのだが、そこで聖婚の儀礼、——服従儀礼を行うためであったとみることもできるのである。この話は、厠がかつて斎屋でもあったことを基盤にして、すべては展開しているのである。

なお、ここで一言断って置きたいのは、この剣が、「因りて社を立て」とあるように、熱田神宮の神剣になっていることである。だが、これはもともと別々のものなのであって、それが何等かの理由によって、天皇家と尾張氏とのレガリヤが一本の剣になっているとみるべきであろう。

五

このように、厠に斎屋的な性格があるとすれば、そのことと、その中で殺害が行われたこととの間には、どのような関係があるのだろうか。このことを解く一つの鍵は、天皇が小碓命にたいして、「専ら汝ねぎ教へ覚せ」といわれたことばの中の「ねぎ」という語の意味をどのように解するかにあるように思われる。

時代別国語大辞典上代編には、この語に、(1)神の心を安め、その加護を願う、(2)いたわる、ねぎらう、の二つの意味があるとし、この(1)と(2)との関係について、「(1)(2)を通じて他の心をなぐさめいたわる意がある。それが上位の者に対するとき(1)のような願う意に、下位の者に対するとき(2)のようなねぎらう意になる。」と説明し、ここの場合は(2)の意味にとつてある。

そして、現在の注釈書の殆んどが、やはり、(2)の意味にとつている。まず、大系本は、「慰撫して会食に出席するように教えさとせの意。」とし、全集本も、「大碓命の心をいたわるように、やさしく教えさとす意。」とし、集成本も、「大碓命の心をいたわり親切に教えさとすこと。」と注してある。下に「教へ覚せ」という語が付いているのだから、このようにとるのが穏当なところであろう。しかし、それならば、この天皇のことばを受けて、小碓命が、「既にねぎつ」と答えて、大碓命を殺害してしまったのはどのようにとつたらよいのだろうか。これについての説明はあまりみられない。ただ、集成本に、

天皇が小碓命に命じた「ねぐ」の意味が、小碓命には暴力的な「ねぐ」の意味にとられた。今日でも「かわいがる」が「やさしくする」と逆に「痛めつ

ける」の意に、卑俗に使われることがある。⁽¹¹⁾

と説明してあるのが注目される。このようにとれば、こ
こは理解できるのだが、ただ、古代にもこのような語の
使い方が他にもあったかが問題として残ろう。

それならば、(1)の神に願う意にとってみることはでき
ないだろうか。厩に斎屋的な性格があるのなら、同じ
ように神にかかわることなから、この語意と結びつ
けてみることも或いは可能なのではないだろうか。これ
については、丸岡節江氏に卓説がある。丸岡氏は「ネ
グ」という語をある神事儀礼の名称であったのだろうと
推測し、記紀をはじめ古代文献にてくる「ネグ」の十
三例を詳細に検討した上で、「ネグ」が戦いまたはそれ
に類することに出かける前に行われていることから、そ
の神事儀礼を、

そうするとこれから「ネグ」について、更に一つの
想定が可能になる。それは「ネグ」という語によっ
て表わされる神事儀礼は、常に戦いの出立の前にな
さるべき一種の戦勝予祝儀礼であるということであ
る。未開社会では予祝は重要な神事儀礼であり、戦
争においても、中心は武力よりもむしろ呪力なるも
のが占めていた。⁽¹²⁾

と、戦勝予祝儀礼であったとされている。まことに魅力

的な説であり、私も神事儀礼という点には賛成したい。
ただ、その儀礼の中身については、少し視点を変えて、
私なりの見解を述べてみたい。丸岡氏はこの神事儀礼
を、倭建命の征討、とくに西征に結びつけ、「その神事
を無事終了しえた⁽¹³⁾」ので平定に出立したのだとしていら
れるのだが、私は、大碓命と小碓命とが兄弟であり、両
者がともに天皇有資格者であつたらしい点にポイントを
置いて考えてみたい。

小碓命——倭建命は東征の帰途尾張国に立ち寄り、美
夜受比売と結婚している。先にも述べたように、この結
婚は単なる結婚ではなく、服従儀礼であつた。彼は、天
皇の代行者として、この席に臨んでいるのである。すれ
ば、彼は天皇有資格者の一人であつたとみて置いてもよ
いのである。

一方、大碓命にも、地方豪族の女と結婚した話が畧行
記に載っている。

ここに天皇、三野国造の祖、大根王の女、名は兄比
売、弟比売の二りの嬢子、その容姿麗美しと聞こし
めし定めて、その御子大碓命を遣はして喚上げたま
ひき。故、その遣はさえし大碓命、召上げずて、す
なはち己れ自らその二りの嬢子と婚ひして、更に他
し女人を求めて、詐りてその嬢子と名づけて貢上り

き。ここに天皇、その他し女なることを知らして、
恒に長眼を経しめ、また婚ひしたまはずして、惚し
めたまひき。

ここでは、大碓命は、天皇が所望された兄比売、弟比売
を横取りしたような話になっているが、これはこの後で
大碓命が殺害されるはめになることへの伏線のために、
このように変容したのであって、本来は彼が天皇の代行
者として兄比売、弟比売と結婚する、というような話だ
ったのであろう。つまりは、三野国造の服従儀礼だった
のである。ということ、大碓命もまた天皇有資格者の
一人だったということになるのである。

さて、古代のある時期に、次代の天皇を決定する場
合、天皇の子供達の中に、何人かの天皇有資格者がい
て、その中から、何等かの方法によって、一人が天皇と
して選ばれるようなことがあったらしい。⁽¹⁴⁾しかも、天皇
が最高の権力者であってみれば、その地位の獲得をめぐ
って、天皇有資格者の間に激しい闘争が展開したことは
十分に考えられるのである。例えば、允恭記にみられる
軽太子との穴穗御子との対立である。この二人は天皇と
大中津比売命との間に生まれた兄弟なのである。この
中、軽太子が一応「日継知らしめすに定」まっていたの
だが、同母妹軽大郎女との悲恋という予想外の事件が起

き、結局は伊余に追放され、そこで亡くなってしまふ。
そして、穴穗御子が次代の天皇の地位に即き、安康天皇
になっている。この物語では、兄と妹との悲恋というこ
とが絡んで、軽太子は天皇になるべき資格を失ったよう
になっているのだが、実際は、二人の間には、

ここをもちて百官また天の下の人等、軽太子に背き
て、穴穗御子に帰りき。ここに軽太子畏みて、大前
小前宿禰の大臣の家に逃げ入りて、兵器を備へ作り
たまひき。その時に作りたまひし矢は、その矢の内を銅
にせり。故、その矢を身けて輕箭と謂ふ。穴穗御子
もまた兵器を作りたまひき。その王子の作りたまひし矢は、す
ま。謂ここに穴穗御子、軍を興して大前小前宿禰の家
を囲みたまふ。(記)

というような、実力による天皇争奪戦があったとみた方
がよいかも知れない。⁽¹⁵⁾

それならば、この大碓命と小碓命の場合であるが、仮
りに二人が天皇有資格者であったとするならば、小碓命
は大碓命を殺害しているのだから、結局はそれが後に小
碓命自身をも追放させることになるにしても、この時点
では、小碓命が天皇争奪戦の勝利者になったということ
になるだろう。もともと、この二人は、軽太子と穴穗御
子のように、共に天皇有資格者として、天皇の地位を争
っていたのであろう。

六

そこで、このことと、厩に齋屋的な性格があったこととを結び付けてみたら、どういふことになるのであろうか。二人は厩の中でもと何をしていたのであろうか。ここで、「ねぐ」という語に神の加護を願う意があることを生かしてみたい。すると、二人は天皇の地位を争っていたのだから、そのことについて、神に何かを願っていたといふことになるだろう。その何かは、いうまでもなく、天皇になるということである。自分が天皇になることを神に願っていたのである。それについて、神の啓示をきくということである。二人は、齋屋である厩の中に籠って、そこに神を招き、どちらが天皇に相応しいか、という神の意志をきいたのである。だから、この場合、神の意志は小碓命の上にあったということになる。

崇神紀四十八年の条に次のようなことが記されている。四十八年の春正月、己卯の朔にして戊子の日、天皇、豊城の命と活目の尊とに勅したまひしく、「汝等二人、慈愛共に斉し。曷を嗣と為まかも知らに、各宜夢みよ。朕夢以ちて占へむ」とのりたまひき。

二の皇子、ここに命を被りて、淨沐みて祈ひて寝まし、各夢を得たまひき。会明に兄豊城の命、夢の辞を天皇に奏して曰ひしく、「みづから三諸山に登りて東に向きて八廻弄槍し、八廻撃刀しき」といひ、弟活目の尊、夢の辞を奏して曰ひしく、「みづから三諸山の嶺に登りて、繩を四方に縋へて、粟を食む雀を逐ひき」といひしかば、天皇相夢して二の子に謂りたまひしく、「兄は一片に東に向きて東の国を治むべし。弟は悉に四方に臨みて宜朕が位を継がせ」とのりたまひき。夏四月、戊申の朔にして丙寅の日、活目の尊を立てて皇太子と為したまひ、豊城の命をして東の国を治めしめたまひき。こは上毛野君、下毛野君の始祖なり。

豊城の命と活目の尊は異母兄弟である。両者ともに天皇有資格者であったのであるが、崇神天皇はどちらを次代の天皇にするかに迷った挙句、「朕夢以ちて占へむ」と夢によって判断している。古代の人々にとっては、夢は神の啓示であった。つまり、天皇は神の啓示によられたといふことなのである。そして、活目の尊が次代の垂仁天皇になった。

宗教的な古代においては、神の啓示が絶対的なものであった。大碓命と小碓命は、齋屋である厩に籠り、天皇

になるための神の啓示を待ったのである。そして、小碓命が神によって指名され、一方、大碓命は指名から外れ、敗れたのである。厠での神事儀礼の中身をこのようなものとして解してみたいのである。これがこの物語の一番の原話なのである。

そして、敗れた大碓命は天皇の周辺から遠ざけられることになったのである。景行紀四十年の条をみると、東征を命ぜられた大碓命は、

時に大碓の皇子愕然きて、草の中に逃げ隠りしかば、使者を遣して召し来らしめつ。ここに天皇責めてのりたまはく、「汝が欲はざらむを豈強ひて遣さむや。何ぞはいまだ賊に対はずしてあらかじめ懼ることの甚き」とのりたまふ。これに因りて遂に美濃に封じたまひしに、仍りて封じし地に如き。こは身毛津君、守君、すべて二つの族の始祖なり。

とある。彼が卑怯であったために、美濃国に封じられたようになってはいるが、もともとは天皇争奪戦に敗れたために、美濃国に追放された、というような話だったのでないだろうか。すれば、厠での神事儀礼に引きつづく話ということになる。一連の話だったのである。

それにしても、天皇に指名されたであろう小碓命も、比類なき勇武が逆に災いとなって、これまた追放されて

しまうのである。ここでは、争った二人の天皇有資格者が、ともに追放されるという結果に終ってしまうのである。そして、若帯日子命が次代の成務天皇になった。

ところで、古事記には、厠で殺害するという話が一つある。履中天皇には、墨江の中津王と蝮の水齒別命という二人の実弟がいた。その墨江の中津王が反逆を企てたので、天皇は蝮の水齒別命をして殺害させようとした。そこで、蝮の水齒別命は、隼人の曾婆訶理という者を使って殺させることにし、

ここに多に禄をその隼人に給ひて曰りたまひしく、「然らば汝が王を殺せ。」とのりたまひき。ここに曾婆訶理、己が王の厠に入るを竊かに伺ひて、矛をもちて刺し殺しき。(履中記)

ということになったとある。そして、その蝮の水齒別命が次代の反正天皇になったのである。ここでは、明らかに厠が天皇争奪戦の現場になっている。厠での神事儀礼が実力的なものに変容したのである。

このようにみえてくると、厠で小碓命が大碓命を殺害したことの背後には、斎屋としての厠での、天皇の地位をめぐる神事儀礼があったような気がするのである。ところが、宗教的な色彩が消えてくるにつれて、この履中記のように、相手を殺害するという、実力的な方法に変っ

てきたのではないだろうか。そして景行記では、その實力を逆に粗暴なものとし、結局は小碓命も征討に追いやられることへの伏線として巧みに使用し、一方、履中記では、天皇の地位を争う者を三人とし、自ら手を下さないで、曾婆訶理に殺させるといふ手の込んだ遣り口を使ひ、一段と物語化したのである。

なお、景行記の場合でいえば、その方法が宗教的なものから実力的なものに変わってきたのだが、厩が依然として現場として残ったために、厩で殺害するというような、英雄の行為としては似つかわしくないものになつたのであろう。そして、これに連動して、「ねぐぐ」という語も、神に願う意から、ねぎらう意に取り替えて使われることになり、さらにことばのとり違えというような筋が加わって、今みるようないさかさか理解し悪い話として形成されてきたのであろう。つまり、今の話は原話から幾段階かの曲折を経ているといふことである。⁽¹⁶⁾

注(1) 時代別国語大辞典上代編には、履中前紀や斯道文庫本願経四分律古点などの例を引用して、「便所。川の上に架け渡して作った屋の意。」(二〇九頁)と注してある。

(2) 李家正文博士 古代厩攷 二九頁〜三一頁

(3) 日本靈異記中四十一を見ると、桑の木に登って葉を摘んでいた女の子が蛇に犯されたという話がある。この話は聖婚神話が崩れたものであり、その蛇は「桑に纏ひて登る」と桑の木に登っている。古代信仰では、蛇は神なのだから、桑の木は聖樹ということになる。

(4) 堀内民一博士 定本 万葉大和風土記 一六八頁

(5) 日本民俗事典 六四一頁 「便所神」の項目

(6) 大藤時彦氏 厩神考(『日本民俗学の研究』所収) 四四頁〜五二頁

(7) 李家正文博士 前掲書 一六七頁

(8) 柳田国男氏の増補山島民譚集(『東洋文庫』)をみると、「筑前黒田家ノ家臣ニ鷹取連松庵ト云フ医師アリ。妻ハ四代目ノ三宅角助ガ娘、美婦ニシテ胆力アリ。或夜厩ニ入りシニ物蔭ヨリ手ヲ延バシテ悪戯ヲセントスル者アリ。次ノ夜短刀ヲ懐ニシテ行キ矢庭ニ其手ヲ捉ヘテ之ヲ切放シ、主人ニ仔細を告ゲテ之ヲ灯下ニ檢スルニ、長サハ八寸バカリニシテ指ニ水搔アリ、苔ノ如ク毛生ヒテ粘リアルハ、正シク本草綱目ニアル所ノ水虎ノ手ナリト珍重スルコト大方ナラズ。」(二〇頁)とあって、河童が厩から入ってきている。その河童は水神なのだから、ここでも、厩は神の入口になっている。

(9) 三島溝昨は、三島地方の豪族とも、その豪族の祭っ

た神の意ともとれるが(全集本一六三頁 頭注 六)ここでは一応豪族ととって置いた。

(10) 尾崎暢狹博士も、この「しけしき小屋」について、

「そうすればやはり、葦の茂った水のほとりの小屋が『葦原のしけしき小屋』であって、川屋・廁・室屋(後述)の印象が同時にそこに絡んでいるということになる。もっと言えば、単に葦原の小屋というだけでも、古代的景況のもとの『ひっそりと隠れた』(土橋氏)水田小屋であったことは分るから、これを『しけしき小屋』と特称したのはやはり、神婚の場としての川屋に廁の連想を重ねねあらずためではなかったか。」「万葉歌とその周辺」(二六九頁)と、もともと廁であり、そこで聖婚が行われたものと推測されている。

(11) 日本古典集成 古事記 一五七頁 頭注 一七

(12)(13) 丸岡節江氏 ヤマトタケル伝承―「泥疑」試論

―(「古代文化」第二十七卷第六号)一九頁

(14) 拙著 古事記研究―古代伝承と歌謡― 二六六頁

(15) 拙著 前掲書 二六一頁

(16) 吉井厳氏は、この話について、「小碓命の兄殺害の話も、本来は皇子を主人公とした話ではなく、言葉のとり違えの趣向を中心とした話で、少し頭のにぶい馬鹿正直で力持ちの男が、こともあろうに、兄を殺してしまうという、民衆のあいだの笑い話の一つの核とし

て、作りあげられたものと考えられる。」「ヤマトタケル」(三〇頁)とし、その原話を、ことばのとり違えをテーマとした民話としていられる。まことに興味深い説であるが、ここでは少し違った解釈を試みてみた。